「パン屋再襲撃」のなぞ

劉　潔[1)]・大橋　眞[2)]

A mysterious story of "The Second Bakery Attack"

Liu Jie, Makoto Owhashi

Abstract

In a mysterious short story of "The Second Bakery Attack" written by Haruki Murakami, a couple plays an impenetrable behavior in the re-attacking of a hamburger shop. In addition, the writer's attitude on his life likely reflects the whole of this story in that the hero will not express his decisions even in the points that need a conclusive decision. In the short story, the hero and his wife suddenly got hungry in a midnight and he told the story of the first attack of the small bakery shop. The serious mind lead to the curse that they could easily get enough amount of bread under the condition of listening Wagner's music with subtle discrepancy of minds between the hero and the shop owner. In this situation, the shop owner succeeded for obeying the attackers without the use of weapons. This means the irony and mockery for his own life as the result. Here Wagner appeared like the symbol of the curse for the life style of hero. In order to release from the curse, he and his wife tried to re-attack the bakery shop again as the result of spontaneous story. The story of the re-attack of the bakery shop was full of discrepancy between the attackers and the shop master. They have to change the attack of bakery shop to the hamburger shop, and the shop master proposed to offer the proceeds from the sale. Although they succeed for getting hamburgers without paying money, they felt many discrepancies from the supposed story. From the overview of his life in the story, we may be able to compare his life to our so-called serious life. As the result, we may aware of the meaning of a confortable life style without the expression of his own opinion nor the opposition to the people.

[1)]青島理工大学外国語学院・[2)]徳島大学総合科学部

1　はじめに

1村上春樹の「パン屋再襲撃」という短編小説には、普通の感覚ではどうも理解しきれそうにない二人の夫婦が描かれている。しかし、それ以外の場面の節々においても、作者の人生というものに対する態度が浮き彫りにされているのである。この小説は、我々が人生のあり方というものをまじめに見つめるというこだわりを基軸にしてみると、少し肩すかしを浴びせられるかも知れない。その点から考えると、決して面白みに欠いている作品ではないと思われる。この小説によって、私たちの非日常的とも言えるような、人生のある意味では空疎な部分が象徴的に浮き彫りにされてくるのである。その面から、この小説が私たちの感性に訴えかけてくるものとは、一体何なのかと言うことを取り上げて、考察してみたいと思う。それによって、私たちが考えている人生観というものを、より俯瞰的に捉えるきっかけとすることを試みたい。

この小説は、村上のいつもの文体と異なった、やや饒舌的な気取りから始まるのだが、やがて彼の持ち前である軽妙な話し口によって、独特のレトリックを貫きながら、ユーモアに富んだストーリーが展開されていくのである。冒頭において、主人公の人生観に触れた「我々は実際には何ひとつとして選択していないのだ」という一節が真っ先に目に入ってくる。ここで言うところの「何ひとつとして選択していない」とは、おそらくそれも限りなく消極的な一種の選択を意味していると思われる。まさに、この部分がこの小説の主人公の人生観を形づくる基本的な要素でもあり、我々の自覚している人生観からすると、空疎に抜け落ちている部分なのではないだろうか。その内容を考えるために、パン屋襲撃、さらにパン屋再襲撃とは、どのような話であるかを、この小説の展開から抜き出して見ていきたい。

2.パン屋襲撃とパン屋再襲撃

2.1パン屋襲撃の回想

この小説に登場する、「パン屋襲撃」と「パン屋再襲撃」の事件は、それぞれ主人公の耐えがたい空腹感に端を発して事件が展開していくのである。この空腹感は、この小説全体の全文を貫く空腹感に対するレトリック、即ち「海底火山」を見下ろす「ボートを取り囲む透明な海水」という表現によって、空腹感と心の不安を一連の感性的な描写を取りながら、主人公の堪えがたい空腹感の状態を、より鮮明に示すための抽象的、象徴的な表現として、読者のこころに植え付ける仕掛けにもなっている。そういう空腹感のもとで物語

が始まり、絶妙にストーリーが展開していくのである。

主人公に、ずっと昔の出来事であるパン屋襲撃のことを思い出させたのは、夜中の二時前、妻と二人を突如襲った竜巻のような空腹感からのなりゆきからであった。そのパン屋襲撃事件について、妻に回想の形で自然に語りかけるという形で、ストーリーが展開していく。当時、主人公は一人の相棒と、今と同じように耐えがたい空腹感を味わっていた。どうしようもない自分たちの飢えを充たすために、パン屋を襲撃することを計画したのだ。二人は町中にありふれた、そんなにぱっとしないパン屋を選んで、包丁とナイフでパン屋の主人を脅して単純にパンを強奪しようとした。意外なことに、パン屋の主人はクラシック音楽のマニアで、二人の強奪に先立って、ある取引を持ちかけるのである。それまで、店主がかけていたワグナーの序曲集を、最後まで一緒に聞き通すのなら、好きなだけのパンを持っていっていいという、一見すると好条件に見える取引である。二人は驚いたが、とうとう刃物を収めて、最後まできちんとワグナーを聞きとおした。すると、パンを手に入れるという当初の目的は一応達せられた形になったわけだが、とうてい襲撃とは言えないような、パン屋襲撃事件の結末となってしまったのだった。

2．2パン屋再襲撃の事件

午前二時半の東京の街。竜巻の如き空腹感に襲われた二人の夫婦、主人公の話のなりゆきから、パン屋をもう一度襲撃することに急遽決定したのであった。主人公と妻は、車を走らせて、東京の所々を走り回るが、その時間に営業しているパン屋は見つからなかった。驚いたことに、妻は散弾銃、予備の散弾から黒いスキー・マスクに至るまで完璧とも言える装備を用意していたのだ。主人公は、営業しているパン屋がないことから、今回の計画をあきらめることを妻に提案したのであるが、「マクドナルドにしよう、パン屋のようなものだから」という妻の主張に押し切られるような形で、再襲撃を実行に移すのである。二人はマクドナルドに入ってから、素早くスキー・マスクを頭からすっぽりとかぶり、銃を従業員に向ける。「ビッグマックを30個、テイクアウトで」という注文の形で、収奪用に三人の従業員にビッグマックを三十個も作り上げさせたのである。ちなみに、同時に注文したコーラの代金はきちんと支払っている。また、「お金は差し上げます」という店長の申し出も固辞している。あくまで、パンの収奪へのこだわりをみせているのだ。念のために妻は従業員三人を柱に縛り付けた後、二人は店を離れた。適当な場所に止めて、夜が明

けるまで戦利品を食べながら、主人公は妻に対して、今回の収奪の必然性について、自責観を込めて問いかけるのであった。

3．パン屋再襲撃の必要性

この小説には、作者は独自のレトリックをもって、しつこいまでに空腹感を強調している。一見すると、この事件は空腹感による襲撃事件かのように見えるが、それはただ表面的な話の展開にすぎない。このパン屋襲撃と再襲撃の動機は、より人間の内面的な人生観に関わる部分に起因している。この部分を、この小説の主人公の話で言い換えれば、まさに「かけられた呪いのようなもの」が、彼の生活にしわ寄せを及ぼしているという事実である。「この呪いを解くためには、パン屋襲撃を完結させる必要がある」というような、呪いを解く儀式的な色彩がこの小説において貫かれているのだ。それでは、人生観にかかわる内面的な部分に焦点を絞って、パン屋襲撃の事件を遡って見てみよう。

まずは、最初のパン屋襲撃事件における呪いである。主人公と相棒は、収奪をもくろんだ町のパン屋の主人から、パンの提供の条件として、ワグナーを一緒に最後までじっと聞きとおすことを提示される。取引条件として、突然にワグナーが出てきて一瞬躊躇するが、結局このパン屋の主人が提示した条件で妥協してしまう。その結果として、パンを手に入れることができたということが、強奪が成立したことによる結果なのではなく、いわば交換取引という形で、店主側の提案に従った結果として、パンを手に入れることが出来たという結末になったのである。確かにパンを手に入れることには成功したのだが、ある意味では二人に対する呪いが、ワグナーに出会った一瞬から始まったとも言えよう。このワグナーには、見方によって、いくつかの呪いの象徴のような意味を抱えているように思われる。主人公の人生に寄りかかるような呪いは、ワグナーのオペラに登場する呪いを彷彿とさせるような場面でもある。呪いの象徴としてのワグナーは、作者の人生観にも何らかの関わりがあるのかも知れない。

パン屋襲撃事件の内容を具体的に、主人公と相棒の立場から考えると、周到に準備されたパン屋襲撃の計画と用意した刃物を用いての脅し、即ち暴力的な手段によって、単純にパンを強奪するというストーリーは、当初の筋書き通りにはならなかったのである。このパン屋の主人は、二人が想定したように、刃物を使っての恫喝に怯えて素直に従うどこ

ろか、刃物を持つ二人を前にしても、決して慌てず騒がずというきわめて落ち着いた態度は、二人にとってある意味では大変挑発的な意味を持っていたことは、注目に値するだろう。すなわち、慌てさせることと怯えさせる手段として用いるべく用意した暴力手段である刃物は、瞬時にして、その的確な使い道が奪われてしまったのである。こういう状況下において、二人は混乱状態ともいえるような精神状態に陥ったのであった。おそらく、この場においては、妙な閉塞感がひっそりと生じていたに相違ない。そして、その直後に予想外のワグナーが登場したのだ。もう、彼らの逃げ道は何ひとつとして残されていなかった。そして、ほかに選択の余地もなかったと推察される。そのために、パン屋の主人の取引提案に対して、徹底的に妥協するしかなく、パン屋の主人に支配されるはめに陥ってしまったのである。その直前の場面と比較すると、収奪者と非収奪者の立場が逆転し、正反対な展開がもたらされることになった。すなわち、刃物という暴力的手段を用意して強奪に来た二人は、かえってパン屋の主人に忠実に従わざるを得なくなってしまったのである。暴力手段を自ら放棄すると同時に、二人はただで主人からパンをもらうことになった。しかしそれは、むしろ二人に対する皮肉と嘲笑にほかならぬものであった。このことは、二人に対してどんなに莫大なショックを与えたのか、はたまた壊滅的な精神的ダメージをあたえることになったのかは想像にかたくない。ここには暴力が自身の威力を発揮する場を失い、そして暴力を示そうとする人は、身に寸鉄も帯びぬ人に征服されたという意味が秘められている。そしてそのすべてが、ワグナーに起因しており、やがてそれはパン屋再襲撃に直接かかわる「象徴的な呪いのようなもの」と化していくのである。

この小説の主人公の脳裏には、その「疑いの余地なく呪い」のようなものから、今までの生活において様々な問題が起こったとする因果関係のロジックが焼き付いており、これを抜きにしては、現実を何も語れなくなってしまったのだ。実際に、パン屋襲撃の時の相棒と別れる結果となり、見かけよりずっと強烈なショックというものが、何かにつけて現実の今の生活に暗い影を落とすようになったのだ。そこには、何かの間違いがどこかに存在しているという感覚から抜け出せない自分がある。それのみならず、今の相棒となる妻も「結婚するまでにこんなひどい空腹感を味わったことなんてただ一度もない」というように異常な状況に陥ることになり、主人公に対する呪いに巻き込まれてしまったのである。パン屋襲撃の事件に端を発する呪いであるだけに、「もう一度パン屋を襲う」「それ以外にこの呪いを解く方法はない」というロジックに基づいた推理によって、夫婦二人はパ

ン屋を再び襲撃するという行動を起こすように仕向けられていったのである。すなわち、パン屋再襲撃という行為を実行することは、この呪いを解くための唯一無二の行動として、ほとんど決定的な意味を持つものと思われるに至ったのだった。

4．パン屋再襲撃から見る作者の人生観

4．1自分なりの価値観

この小説は一人称をもって書かれているが故に、主人公に作者自身の姿が投影されていると思われがちである。たしかに、作者村上春樹自身の面影を髣髴とさせるような主人公の姿は、作者自身の人生観を反映している部分が大きいと思われる。しかしながら、作者の人生観という内面的な洞察は、妙なパン屋襲撃、再襲撃事件そのものにも増して、作品全体を通じての作品の意味のとらえ方の部分に暗示されていると考えられる。さらには、パン屋襲撃、さらにパン屋再襲撃の事件を通して、主人公の自分なりの価値観という描写において、作者の価値観が投影されているのではないだろうか。

強奪は、おそらく強盗と同義のものとして一般社会では認識されていると思われるが、この小説の主人公の考えでは決してそうではない。「我々は、自分たちの飢えを充たすだけの糧秣であるパンを求めるのであり、何もお金を盗ろうとするわけではない。生きるための最低限の糧を、それをふんだんに有する者から求めるという行為を行う我々は襲撃者であり、強盗ではない。それ故に、パンを求めることと強盗とはまったく関係のない独立した事象であり、別の行為であるという解釈に基づいている」ということであろう。このような解釈には、主人公の自分なりの価値観がしっかりと伝えられているのである。そういう意味からすれば、最初のパン屋襲撃に際しては、襲撃対象として大きな店ではなく、そんなぱっとしないありふれた町のパン屋を選んだことは、それほど理解しがたいものではない。このようなパン屋襲撃に対する考え方は、この小説において、主人公が自分なりの価値観を暗示する象徴的な働きをしているのではないだろうか。

そしてパン屋再襲撃の時には、店長が「金はあげます」とか「お金を余分にさしあげますから……」という言葉を投げかけている。それは、普通の強盗にとっては正にその意にぴったり合うような言葉である。それにも関わらず、主人公と妻は、店長の提案を無視したまま「ビッグマックを三十個」という当初の主張を押し通したのである。彼らは、お

金でなく生きるための糧秣であるパンを狙いに来たのであって、その理念に合致しないお金は一概に要らなかった。ちなみに、余計に注文したコーラの分は、きちんとその代金を支払ったのである。「パン以外に何も盗る気はない」という発言からも、登場人物の妻も主人公の価値観を共有しているというふうに解することができよう。

4．2自分への自嘲

パン屋襲撃とパン屋再襲撃の両場面では、主人公の感性とそれに基づく行動において、現実世界との間には、微妙なずれがあり、それがこの小説の展開の欠かせない役割を演じているのである。前述のように、パン屋襲撃の計画を実行に移す段階において、その周りの環境と決定的なずれが生じたのだ。もともと殺害の危険性については、みじんもないような暴力であったのだが、パン屋の主人と正面切って交戦する際に、彼の弱みが露呈して、ついに敗北とも言えるような結果に終わってしまったのである。さらには、そういう意識のずれが、やがて彼らを襲ってくる呪いにつながるものであることはいうまでもない。

最初のパン屋襲撃において、パン屋の主人との感性のずれの前で妥協した結果として、「呪い」を招く結果となった。この「呪い」を解くために、パン屋再襲撃の実行を企てたのである。しかし相変わらず、主人公の感性は、現実世界との間に大きなずれが存在したのである。まず最初に、襲撃の候補としてのパン屋は、懸命の探索にもかかわらず深夜の東京においては、ただの一軒たりとも見つからなかった。そのために、襲撃先を急遽マクドナルドに変更せざるを得なかったのである。前回の町の平凡なパン屋と比較して、パン屋とは言いがたいマグドナルドを「パン屋みたいなもの」という妻の強引な解釈に妥協するしか、他に方法がなかったのである。そして襲撃の実行に移った二人は、従業員と客が騒ぎ立てる行為を封じ込める手段として、首尾よく武器を準備した上で、厳しい警戒が予測される店に突入したのだった。しかし、彼らの目にとまったのは、意外なことに抗議しない冷静な三人の従業員と、眠っているカップルの客の二人であった。パンの代わりのハンバーガーの要求に対して、店長はお金を渡したがるのだった。店舗の警備に関しては、お金を要求する強盗を想定しており、強盗の被害に関しては保険がかけられている。しかし、ハンバーガーの盗難に関しては想定外であり、店長はこれを報告する際に面倒な手続きが予測されたのだ。そのために、店長はお金を差し出すという提案をたびたび出したのである。しかし、主人公側は、あくまでお金でなくパンに対する要求に固執して、これを

貫き通した。パンは収奪の対象であるが、これと同時に注文したコーラに対しては、きちんと代金を支払っている。これらのことは、主人公と現実世界とのずれであり、「齟齬」という表現で表されるような違和感を示すものとして注目して良いだろう。

現実の世界は、そこに生きる人たちとその周囲の環境の間において、感覚のずれ、齟齬が満ちあふれている。この小説の主人公の目にもこの現実世界とのずれが、飢えを充たすためにせよ、呪いを解くためにせよ、ついにパン屋を襲撃させ、さらに再襲撃させずにはおかないという結果を導いたのである。この小説では、このようなずれを伴う世の中であっても、懸命に生きていかざるをえない主人公の姿を垣間見ることができる。ここには、そういう自分自身に対する皮肉や、一種の黒い諧謔に近い調子がある。この小説に描かれた、パン屋を襲うことに執着する主人公は、正当な収奪者であって強盗ではない人として誇張があるかもしれない。もっとも、やむを得ずそういう手段をとりながらも、違和感のあるこの世の中を生きていく自分を、自嘲的に誇張ながら描かせることで、この小説では自身の自嘲話として、ストーリーが展開していくのである。

4．3周りとの知的距離

この小説の主人公は、終始自己を主張せずに生きているのである。また、何かを論争する気もまったく見られないのである。彼の持っている暴力手段としての刃物や散弾銃は、誰か人を傷つけるわけでもない。この主人公が、自分なりの物事の考え方、あるいは原則を静かに守っているという姿勢は、実に人々の心の琴線に触れるのである。このような他人に対して、常に適当な距離を保ちつづける主人公の姿は、何よりも気にかかる存在になっていると思われる。

人当たりが限りなく自然な形で流れに身を任せるような生き方、それが実に快いのだ。他人を見下ろさず、他人に無理強いをせず、つかず離れずの状態で、知的距離を上手に把握しながら行動しているというイメージなのである。周りの環境に対して世に阿らず、世の雰囲気に迎合せず、ただ世のなりゆきに任せるという、優雅な主人公の生き方を味わえる。いかに繁栄した現実世界の中にあっても、主人公にとっては、そのような世界は違和感だらけなのである。ぱっとしない現実世界の一隅ではあるが、現実とずれている心及び魂の奥底においては、自然に誠実に生きているという主人公が、作者のゆったりとした言葉によって、ありありと描き上げられている。ここには、周りとの知的距離が分かる主人

公の影がひそんでいるように思われる。

5. おわりに

この小説は、村上春樹の他の作品と同じく軽やかさ、うつろな感、微妙な味わいが全体を貫く基本的なイメージとなっている。特に作者の人生への態度が、ストーリーを通じて抉り出す面において、まさしく意味深長なのである。

「我々のあの永遠に続くかと思えた深い飢餓も消滅していった」。呪いは？呪いも完全に解消されたのであろうか。自分なりの価値観を持つ限りに現実世界との違和感が伴うわけである。「世の中にはずいぶんたくさんの呪いがあふれている」、呪いがまだ続いている限りに飢餓感が再びもと通りに襲ってくるかもしれない。

僕はボートの底に身を横たえて目を閉じ、満ち潮が僕をしかるべき場所に運んでいってくれるのを待った。

参考文献

1．小島基洋　春樹「パン屋再襲撃」論―「相棒」　ヴェーヌス・「妻」ゼンタとの愛の襲撃　札幌大学総合論叢（25），113-123，2008年
2．高橋 龍夫　村上春樹「パン屋再襲撃」の批評性―グローバリズム化へのレリーフ　専修国文（83），39-61，2008年
3．村上春樹　《パン屋再襲撃》文藝春秋　1989年4月
4．森本隆子《「パン屋再襲撃」―非罪の名に向けて》（村上春樹―予知する文学〈特集〉）―（作品を論ずる）　國文學 ： 解釈と教材の研究 40(4)，90-94，1995年
5．雷世文 主編　《相約挪威的森林―村上春树的世界》　华夏出版社 2005年
6．林少华　《村上春树和他的作品》　宁夏人民出版社　2005年